

「いのちもてあそぶひと」

登場人物

包帯の男

彷徨う女

学生1

学生2

眼鏡の男

★

彷徨う女が線路脇にいる。

そこに包帯の男がやってくる。

頭部は包帯で巻かれ、目と口と鼻の部分だけ、切り取られている。

彷徨う女

・・・踏み切りはもつと先ですよ。

包帯の男

そうですか。もつと先ですか。

彷徨う女

どこかへいらつしやるんですか。

包帯の男

行こうかと思うんですがね。あなたもどこかへ？

彷徨う女

行こうか、どうしようかと思っっているんです。

包帯の男

なるほど。行くのもいいが、どんなものでしょうかね。うまく、

ひと思いに、行けますかね。

彷徨う女

さあ、行ってみないことにはわかりません。

包帯の男

このへんじゃ、やっぱりここでしよう。

彷徨う女

そうですね。ここらあたりでしようね。

包帯の男

別に迷うことはないんですけど、でも迷いますよね。

彷徨う女

いろいろ考えるからですよ。

包帯の男

僕はこう見えて、センチメンタルなことは嫌いな男ですがね。書

きひとつしていないんです。それというのも、理由ははっきり

しているし、これがまた、散文的ですね。

彷徨う女

散文的？

包帯の男

僕はね、死ということ、ある問題を解決しようとしているので

はありません。すでに死人に等しい自分のからだを、自分で処理しようとしているだけなのです。だからなにも、今更、英雄的な覚悟や、非現実的な空想で、この一瞬を、悲壮な物語に作り上げる必要などないのです。

彷徨う女

私もそうです。

包帯の男

いやいや、あなたは分かっている。失礼を承知で言いますが、ただの出来心でしょう？

彷徨う女

人の苦しみを、そう簡単に片付けられたら、たまらないです。

包帯の男

だから失礼を承知で、って言ったじゃないですか。まあ、いいです。とにかくこうして、偶然、同じ死に場所を選んで、同じ時間に落ち合った。ただそれだけの事実、そうコダワルことはありません。どうぞ、お構いなく。

彷徨う女

いや、あなたの方こそ、お先にどうぞ。ただし、目の前で勝手なことをやられても困りますけど。

包帯の男

勝手なことってね・・・

彷徨う女

こう見えて、私人一倍、物事を考える方なんです。軽率だとか、底の浅い人間だと思われるのが、何より不愉快なんです。

包帯の男

じゃあ、ひとつ、その理由というやつを伺うことにしましょうか。

彷徨う女

別にお話してもいいんですけど、それより、あなたは？どういう訳で？仕事のトラブルか何か？

包帯の男

そう決め付けてはいけません。

彷徨う女

じゃあ、どんな？

包帯の男

・・・僕はね、こうみえて応用科学の研究をしている学者なんです。人工ダイヤモンドの発明に没頭しているんです。それも九分九厘まで出来上がっていたのですが、ちょっとしたことから、薬品が爆発しましてね。

彷徨う女

いいじゃありませんか。九分九厘まで出来上がっていたのなら、それを続ければ・・・顔がなんです。（包帯の男は、顔を包帯で覆っている）

包帯の男

許婚があるんです。

彷徨う女

そのひとが、嫌だと言ったのですか？

包帯の男

いえ「構わない」って言うんです。その女は私を愛しているんです。だから僕はこの包帯を取って、この顔を見せてあげたんです。すると彼女は、僕の胸に顔を押しあてて、泣くんです。悲しくは

ないって言うんです。

彷徨う女

わかりますね、その気持ち。

包帯の男

僕には全然わかりません。

彷徨う女

わかるじゃあ、ありませんか。

包帯の男

わかることは、唯一、彼女が嘘をついているということだけです。

僕は、こう見えて、センチメンタルなことが嫌いな男です。だから潔く諦めました・・・さあ、次はあなたの番です。伺いましょう。その理由ってやつを・・・

彷徨う女

(何か喋りそうになるが)・・・しっ、誰か来ました。見つかる

と厄介です。さあ、こちらへ。

彷徨う女、包帯の男の腕を引き、あたりに身を潜める。

制服姿の女子学生が、やってくる。

学生 1

こんなところ・・・危ないわよ。

学生 2

いいの。私、死ぬの。電車に轢かれて死ぬの。この世から、姿を消すの。

学生 1

何かのゲーム？

学生 2

ゲームじゃないわよ。だって私、本当に死ぬつもりだもの、列車に轢かれて。たぶん一瞬よ。むこうから電車のライトが近づいてくる。あんまり早く飛び出すと、きつと運転手が急ブレーキをかけるから、ギリギリまで姿を隠すの。そうしてすぐそこまで近づいたとき、タイミングよく一気に線路に飛び出す！私、中学のとき、高飛びやっていたから、飛び出すのが速いの。人より速いの・・・なんでだろ・・・今頃気づいたよ。私は飛び出すのが速いんだって・・・

学生 1

ね。誰だって、その人らしさがあるの。生まれてきて意味のない人間なんて、この世にはいないの。

学生 2

なんかのセリフみたいだね、今の。つまりは嘘くさい。

学生 1

違うってば。

学生 2

・・・生まれてきたことに意味がないとは思っていないわ。

学生 1

じゃ、なぜ、死ぬの？

学生 2

協力してほしいの、友達として。いい？よく聞いてね。私、死ぬから、そう決めたから。そしたらわかるんだ。本当に私がやりたいことはなんだろう、どうやって私は生きていけばいいだろうか

ってことが。もうすぐ死ぬ、そのときに、はじめてわかるんだ、きつと、そういうのって。だからそのために、まずは死んでみる。わかる？私、今、自由なんだよ。死ぬって決めたら、自由なんだよ。誰にも気を使わず、ただ自分のためだけに、私自身が存在できる、本当に自由。誰だっけいつか死ぬのに、普段はみんな忘れてる。歳もとらないし、老いもしないって思ってる。死ぬってことに、現実味がないんだよ、みんな。

学生 1
・・・わかった。考えていることはわかった。正しいよ。言っていることは正しい。死を意識してはじめてやりたいことがわかる・・・って、そういうことでしょう。だったらいいじゃない？こんな線路沿いに来て、危ない思いをしなくて。ミスドとかで、いいじゃない。

学生 2
ミスドなんかで、どうやって覚悟できるのよ。どうして死を実感できるのよ・・・うち、片親で、お母さん、今、好きな人いるみたいだし、時々私のこと見て「いなければいいのに」って顔するし、わからないでしょ、こういうこと言っても、私がどんな気持ちなのか。

わかるって。気持ちわかるって。

わかるわけないでしょ。

わかるわよ。

どうしてわかるのよ。

想像するから、それでわかる。

そんなの、たかが知れているわよ。

学生 1
学生 2
たしかに、百パーセントはわからないかもしれない。だけど、わかるうって気はある。世界中の誰よりもある。なるべく百パーセントに近いところまでは、わかりたい。

どうして？なんで？

友達だから。私は、あなたの友達だから。それに、助けたい。

学生 1
学生 2
だったら消えて。私の前から消えて。私は死ぬ気になって考えるの。もうすぐ死ぬって信じ込むの。そうして、私のやりたいことはなにか、私は何者か、私はどうやってこれから生きていくのかを考えるの。

だって本当に死んじゃいそうなんでもん。

学生 1
学生 2
死なないって。大丈夫・・・って、あーもー、また死なないって言っちゃった・・・せっかくもう少しで死んだつもりになれたの

に・・・もう・・・あっち行ってよ。

学生 1 本当に死んだりしない？

学生 2 (頷く)

学生 1 信じられないよ。だって、さっき、死んでもいいって言ったし・・・

学生 2 ・・・・もったいないよ。いつかなくなるよ、そういう気持ち。友達だからって、自分のことのように思いやる気持ち・・・絶対にいつかなくなるよ。そんなものに振り回されるのって、もったいないよ・・・

学生 1 そんなことないよ。

学生 2 わからないんだよ、まだ。本当に裏切られたりしたことがないから、わからないんだよ。

学生 1 ただ私は、死んで欲しくないんだよ。いて欲しいの、私のそばに。

学生 2 ・・・・バカじゃない？・・・全然わからない、そういうの。

不意に包帯の男の声。

包帯の男 あなたは、バカですか。

学生たち、包帯の男に、大変驚く。

包帯の男 こんな人、他にいませんよ。探したっていない。なんでわからないんだ。このウストラトンカチ！

学生 2 盗み聞きしてたの？おっさん。

包帯の男 おっさん？おっさんって、なんですか、その呼び方は。

学生 2 おっさん！

学生 1 やめなよ。

学生 2 大丈夫。私、これから死ぬし。何も怖くないし。それに、そもそも、なんで初対面の人から、バカって言われなくちゃいけないわけ？ウストラトンカチって何？おまけに、人の会話を盗み聞くなんて、一体、何の権利があって許されるわけ？

学生 1 そうだけど・・・

学生 2 あっち行って。は・や・く！

包帯の男 ここには、私の方が先に来た。出て行くのは、あなたたちだ。

学生 2 先とか後とか関係ないでしょ。私、死ぬんだから。だから放つておいてよ。

包帯の男 いいから。早く帰りなさい。

学生 2 い・や・だ！

包帯の男 与えられた命を、無駄にするんじゃない。

彷徨う女、登場する。

彷徨う女 確かに、言い方に問題ありね。

包帯の男 ・・・ああ・・・ついイライラしてしまつて。

学生 2 二人いたのか・・・

彷徨う女 別に盗み聞くつもりなんてなかったのよ。それに、私たちだって、ほんの数分前にここで出会ったばかりだし、だから別にこの人の味方でも何でもない。でもほら、ここで出会ったのもなにかの縁だし、だから・・・少しお話しましょうよ。

学生 1 ・・・私、お菓子持っています。

彷徨う女 私もポットに、ココアを持っているの。

包帯の男 あんた・・・死のうとしてたんじゃないのか？

彷徨う女 今はその話はやめましょう。こんなかわいい学生さんとせつかく出会えたんですもの。さあそんな顔していないで、一緒にお茶を飲みましょうよ。

包帯の男 そんな顔つて、表情なんか、わからないくせに。(包帯をしている)

学生 1 ビスケットです。

彷徨う女 わあ、大好き、私、ビスケット。ココアも準備して・・・と

包帯の男 牛乳だろ。ビスケットには・・・ココアじゃなくって。

学生 1 私、持っています、牛乳も。

包帯の男 持っているんですか！

学生 1 ビスケットを持っていくんだったら、牛乳も持っていきなさいって母が。

包帯の男 そりゃ驚きだな。

彷徨う女 さあ座りましょう。それからでも遅くないでしょ。死ぬの。

学生 2 私・・・ゴロゴロするから。

彷徨う女 ・・・なんですって？

学生 2 ゴロゴロするんです。牛乳飲むと、お腹が・・・

彷徨う女 (やや大きさに) あらそう・・・いるわよねえ。大丈夫。そんなに珍しいことじゃあないから。だからほら、そのために、ここにココアがあるんじゃない。捨てる神あれば、拾う神ありってねえ・・・違うか。

包帯の男 ええ、恐らくは。

学生 1 悪い人じゃないよ、きつと。

彷徨う女 そうよお、悪い人じゃないわよー。信じてね。

学生 2、座る。

包帯の男だけが、立っている。

彷徨う女 いいかしら、いただいて、ビスケット。

学生 1 どうぞ。

彷徨う女 じゃ、遠慮なく・・・

彷徨う女、ビスケットを食べる。

彷徨う女 ・・・・ごめんなさい・・・牛乳もいいかしら。

学生 1 ああ、はい。

学生 1、牛乳を水筒のカップに注ぐ。

彷徨う女、それを飲む。

彷徨う女 なんておいしいんでしょう。やっぱり、ビスケットには牛乳ね。

本当、できたお母様ね。

学生 1、ビスケットを食べ、牛乳も飲む。

彷徨う女 どちらの高校？西高かしら。

学生 1 南高です。

彷徨う女 あらそう。何年生？

学生 1 二年生です。

彷徨う女 じゃあ、十七歳ね。

学生 1 はい。ついこの間になりました。早生まれなもので。

彷徨う女 いいわね、十七歳って。

学生 1 若いからですか？
彷徨う女 そうねえ、若いから、まあ、そうだわねえ。出来ることなら戻りたいわ。

学生 1 そうですか。

彷徨う女 (包帯の男に) 戻りたいですか？

包帯の男 さあ、どうでしょう。

彷徨う女 戻りたいですか、十七歳。

包帯の男 ・・・もう忘れました。自分がかつて十七歳だったなんて。

彷徨う女 そうですか。

包帯の男 何の記憶もありません。

彷徨う女 あなた何型？

学生 1 A型です。

彷徨う女 そう・・・あなたは？

学生 2 O型・・・

彷徨う女 そうなの・・・O型なのね・・・あなた・・・

学生 2 ・・・私、行きます。

彷徨う女 待って！

学生 2 どうしてみんな構うんですか？放っておいてください。私は、知りたいたけなんです。そのために死ぬんです。

彷徨う女 一緒に考えたいのよ。ほんの一瞬でもいい、十七歳の気持ちになりたいの。駄目かしら？そんな理由じゃ、今私たちが一緒にいる理由にならない？

学生 2 ・・・

彷徨う女 アイディアはあるわよ。それに、いざつとときに、年長者がいた方が、それなりに便利じゃない？女子高生ふたりじゃ、どこへ行ったって、怪しまれるだけじゃないかしら？

学生 1 そうよ。私もそう思う。いろいろ相談に乗ってもらったらいいじゃない。きっと私たちだけじゃ、思いつかないことだってあるかもしれないし、選択肢は多い方がいいでしょ？

学生 2 私はひとりで考えたい。

彷徨う女 ひとりで生きていけるなんて、思わない方がいいわ。いろいろな人のお陰で生きていられるの。違う？

学生 2 私はもうじき死ぬんです。そんな人間のことなんて、放っておけばいいじゃないですか。

彷徨う女
違うでしょう？あなたはそうやってシユミレーションすることで、どう生きていこうか考えるってわけでしょう？本当は死ぬ気はないわけだから。

学生 2
ですから、本当に死ななくても、どうやったら、余命少ない自分を、自分の中にリアルに再現できるかが、今の私の悩みなわけです。だからこうしてここに来たわけだし、さっきから電車は何本だって通っているし、ずっと飛び出せば、きつと一瞬で死ぬるし、あ、私、飛び出しは速いんです。

彷徨う女
高飛び、たしか、そうだったわよね。高飛び、やっていたんでしよう・・・盗み聞きじゃないのよ。聞こえてきちゃったただけだからね、誤解しないで。

学生 1
だけど電車とか、止めちゃうと、鉄道会社から、何千万円も請求されちゃうって。

彷徨う女
そうね、そう言うわよね。でも、本当に死んだりしたら、家族は苦しむわよ。自殺ってね、自分はよくても、周りが苦しむんだからね。

学生 2
だから！今、家族の話はしないでくださいよ。死のうと思っっている人間に、家族の話をされたら、死ねなくなるじゃないですか。

彷徨う女
・・・そうね、そりゃそうね。
勢いなんです。勢いさえあれば、きつと私、飛び越えることができると思うんです。えいや！って勢いつけて、飛び込めると思うんです。

彷徨う女
勢いがつきすぎると、線路の向こう側まで飛んでしまうから、注意が必要だけどね。

包帯の男
で・・・君は何がしたいんです？具体的に。
ちよつと待ってください。順番に話をしているんですから、そう焦らないでも、いいじゃありませんか。

包帯の男
焦ってはいけません。ただ黙って聞いていて、文句のひとつも言いたくなっただけです。第一、そんなことまでしなけりゃ、やりた
いことが見つからないなんて、その方が問題です。

学生 2
・・・それは批判ですか。
ええ、そう受け取っていただけでも構いません。だって、あなたが死のうと思っっているのは、振りでしょ？芝居ですよ。本
当に死ぬわけでも、ひとりぼっちなわけでもない。結局、ちやほ
やされたいわけですよ、周りに。「そんなこと言わないでよ」て、

言われたいわけです。そんなの、ちゃんちやおかしい。早く家に帰った方がいい。それが嫌なら、警察に電話して迎えに来てもらってもいいですよ。ここにおかしな高校生がいるってね。すぐに二人組の警察官がやってきて、家まで送り届けるに違いない。悪いことは言わない。年長者の意見は聞くものです。今のあなたは、若い人が一度はかかる、麻疹（はしか）みたいなものです。それに、あなたには、あなた思いの友人もいる。何も心配はいらないじゃないですか。

彷徨う女
包帯の男
彷徨う女
退屈な理屈ってね、あなた。

（半ば包帯の男を無視して）さあ、じゃあ、はじめましょう。すぐその線路に飛び込めば、この命はなくなってしまう・・・一瞬で、この肉体は消えてしまう・・・（目を閉じて宗教の祈りのように）

学生 2
彷徨う女
学生 1
（目を閉じ、瞑想している）
いったい私は、死ぬまでに何をしなければいけないか。何をやってみたいか。何をなさねばならないか・・・

学生 1
彷徨う女
学生 1
（鼻をかむ）・・・（音）
（目をつむったまま小声で学生1に）集中できない・・・ねえ・・・集中できないから・・・静かに・・・静かにね・・・（ごめんなさいという顔）

学生 1
彷徨う女
い・・・？
どうだろ・・・何がしたい？・・・今・・・何がしたい・・・？

学生 2
彷徨う女
学生 2
包帯の男
包帯の男
動物園、それも夜の動物園に忍び込んでみたい・・・
冒険ですか。

学生 2
包帯の男
失敬。
話は最後まで聞くものです。

その動物園は少しだけ山を上った先にあるんです。入場ゲートには大きなゴリラと象の作りものがあって、入園者を迎えます。家族連れ、カップル、写真好きの初老の夫婦、おじいちゃんとお孫さん、たくさんの人たちが訪れています。はじめて訪れた私は、園内マップを見ながら、入り口から一番遠いところにある、オーストラリアゾーンを指すことになりました。コアラや、カンガル

ーなどがそこにいます。たつぷり30分ほど歩いて、ようやくオーストラリアゾーンに到着しました。コアラは3匹いましたが、みんなお昼寝中で、丸まった背中しか見られませんでした。カンガルーは、それぞれ好きなように過ごしていて、中には、立ち上がってパンチをお互いに繰り返して出し、喧嘩しているものもありました。それから私はベンチに腰を下ろし、持参したおにぎりで昼食をとることにしました。

包帯の男

・・・まさか、最後までこのまま聞けつて言うつもりかい？

学生 2

その時です。私はふと思っただけです。夜の動物園は、一体どんな所だろう。ここから誰もいなくなったら、一体ここはどこになるのだろう。太陽がのぼり、来園者がいて、そこに動物がいて、はじめて動物園なんじゃないか。同じ場所なのに、太陽が沈み、来園者がひとりもおらず、動物たちもそれぞれの家に帰ってしまった夜の動物園は、一体、何て呼べばいいんだろう。

包帯の男

・・・確かに、夜の動物園は興味があります。でもいいですか？夜の動物園とあなたが死ぬということの間に、一体何の関連があるのでしょうか。私、こう見えて応用科学の研究をしているものですから、そういう理論的でない話というのが、どうも信用できないんです。イライラするというか・・・

彷徨う女

つまり、夜の動物園は、いつだって見られるんじゃないか、なぜ死を覚悟しなければ、行くことができないのか、そういうことですよね。

包帯の男

まあ、そういうことです。

学生 2

・・・わかりません。ただ私は今、このまま動物園に行つて身を潜め、夜になるのを待つて動物園を駆け回つてみたいんです。

彷徨う女

なぜかしら。なぜあなたは今、夜の動物園を駆け回つてみたいのかしら。

学生 1

夜の動物園は、ただ夜を迎えた動物園つてことじゃなくて、そこには、昼には存在しない動物が走り回り、得体の知れない鳥が空を飛び、顔のない警備員が警備をし、姿の見えない人たちがアイスクリームを食べていたりしています。きつと。それがたぶん、夜の動物園で、私たちが生きている間は、決して見てはいけません。だからたぶん、彼女は言うんです。死ぬ前に一度見てみたいって。

学生 2

・・・行けるかな・・・今から。

学生 1 どうやって？
学生 2 どうにかして。

学生 1 (男に) 失礼ですが、車ですか？ここまで。
包帯の男 死のうと思った人間は、わざわざ車でなんか来ないでしょう。徒歩です。

学生 1 (彷徨う女に) 徒歩ですか？

彷徨う女 いいえ。私は違います。車で来ました。日産マーチです。古い車ですが。

学生 2 連れて行ってください！駄目ですか？

彷徨う女 そうねえ……

包帯の男 ……死のうとしていたんじゃないのか。

彷徨う女 ……車で来たら、いけません？

包帯の男 いけないってことはないけれど、いや、でもわからないな。どうにも説明がつかない。

彷徨う女 そういうものです。世の中なんて、理屈だけじゃ、説明が付かないことの方が多いものです。

学生 2 駄目ですか？連れて行ってくれませんか。

彷徨う女 夜の動物園、おもしろそうね。私も行ってみたくなった。あなたの話を聞いていて……それより、さすがお友達ね。彼女の思っていることが、あなたの身体を通ることによって、はじめて会った人にも、本当にわかりやすく響いたわ。不思議よね。これが友情だしたら、友情も悪くないって、そう思った。

学生 2 連れて行ってくれませんか！

彷徨う女 ……いいわよ……

包帯の男 おい、ちよつと待ってくれ。本当に行くのか。

彷徨う女 いけませんか。

包帯の男 いけないことはないが……でも私はまだ聞いていないぞ。

彷徨う女 何を。

包帯の男 理由だよ、理由。あんたがここに来た理由だよ。人一倍、物事を考える方だって、言ったじゃないか。人の苦しみをそう簡単に片付けるなあっていったじゃないか。せめてその理由を聞かせてくれ。このままじゃ、死に切れない……

彷徨う女 ……なんだかうれしい……そこまで知ろうとしてくれるだなんて……

学生 2 死のうとしていたんですか。

彷徨う女
ええ、そうよ。だって、ここはそういうところよ。このへんじゃ、ここよ。

学生 2
ええ、そうですね・・・ここかもしれません。

彷徨う女
少し待てる？

学生 2
ええ、少しだけなら・・・

彷徨う女
私には娘がいるの。一人娘よ。父親とは別れたわ・・・二年前に・・・身勝手な男でね・・・娘は今、病院のベッドにいるの・・・不治の病に侵されていてね・・・助かるためには若くて新鮮な臓器が必要だって・・・先生が言うの・・・でもなかなか、若くて元気な年頃の女の子の臓器なんて、手に入らないんだって・・・そういう機関があるんだけどね・・・どこそこの病院で脳死って判定された、遺族が臓器提供に同意した・・・でも・・・臓器であれば何でもいいってものでなくて・・・若くて新鮮な臓器が必要な・・・このへんじゃ、ここらあたりでしょう・・・ここらあたりにいれば、もしかしたらと思つたのよ・・・

包帯の男
まるで、ミステリーだ・・・
彷徨う女
つらいものよ・・・自分の子供が私より先に死ぬだなんて・・・耐えられないわ・・・この命を捨てても、助けてあげたい・・・考えたわ・・・私が生きたまま死んで・・・あの娘にあげられないかって・・・あのろくでもない男を殺したらどうだろうって・・・でもね・・・どうしても合わないのよ・・・相性っていうものがあってね・・・娘・・・十七歳なんですもの・・・年齢がねえ・・・合わないから・・・よかつたわ・・・今晚、あなた達に会えて・・・光りよ、光りが射したのよ・・・さあ、どうせ死ぬなら、その臓器を渡しなさい・・・今すぐここで、私

があなたから取り出します。そのための道具も持っていますよ。私は、何もおかしなことはありません。

包帯の男
・・・逃げろ。

彷徨う女
これから行くの、動物園に。夜の動物園に行くんですから。私の日産マーチで、古いけれど、まだ足回りは元気よ・・・

学生 1
娘さん、何型ですか。

彷徨う女
何型であって欲しい？

学生 1
・・・それは・・・

彷徨う女
安心して頂戴。（学生2を見て）O型よ。RHマイナスなんてこ

と、ないわよねえ・・・それこそミステリー・・・それも陳腐な・・・

学生 2
彷徨う女

・・・（恐怖で震える）
望んだ通りになったでしょう。これ以上ないシチュエーション。おまけに、人の役にも立てるんですから、心置きなく死ねる。さあ、私と行きましょう、夜の動物園に。大丈夫、あなたはきっと死ねる。リアルに再現できるわよ、自分の中に死といものを。

学生 2

わたし・・・でも・・・
どうしたの？怖くなったの？ちょっと待ってよね・・・私、あなたの話にちょっと感動しちゃったのに・・・

学生 2

私には母がいるんです。

彷徨う女

「いなければいいのに」って顔するんですよ。

学生 2

ただどいるんです。ただ一人の家族なんです。

彷徨う女

私にも娘がいるんです。ください。どうせ死ぬなら、ください。

学生 1

あなたの臓器。さあ、今すぐ渡しなさい。

彷徨う女

ちよっと待ってください。

学生 1

友達思いの、いいお友達ね。でも残念だけど、あなたが身代わり

彷徨う女

になっても救えないの。だって娘はO型なんですもの。A型のあなたには無理。友情にも、超えられない壁はあるの。

包帯の男

やめなさい。こんなこと。

彷徨う女

・・・口を出さないで。あなたはさっさと飛び込めばいいでしょう。

包帯の男

う。さつきから、何本だって電車は通過しているんだし、早く飛び込みなさいよ。ひと思いに、飛び込みなさい。こちらのことは

学生 1

放っておいていいですから・・・

包帯の男

（ビスケットを食べる）・・・おいしい・・・

学生 1

よくこんなときに・・・肝が据わっているというか、鈍感という

包帯の男

か・・・ちよっと、わかっている？今ね、あなたの大事なお友達が

学生 1

ね、変なおばさんに生きたまま内臓奪われそうになっているんですよ・・・もしもーし・・・

包帯の男

・・・おばさんって・・・まあいいや・・・さ、行きましょう。

彷徨う女

車は、むこうに停めています。最近、厳しいですからね。すぐに、

学生 1

駐禁（ちゆうきん）切るんですもの。まったく嫌になっちゃうわ。

彷徨う女

おばさん、何か間違っています。

学生 1

・・・何が間違っているのかしら・・・

彷徨う女

私がここにいるのが、友情に支えられているってことです。

学生 1

・・・

彷徨う女

・・・

学生 1

・・・

彷徨う女 違うの？

学生 1 ええ、全然違います。

彷徨う女 どういうことかしら・・・だってあなた、彼女のことを心配なんでしょう？だから、ここまでついてきたんでしょう？

学生 1 違います。だって私、彼女のこと、世界で一番嫌いなんですもの。だから、目の前で死のうと思って・・・だって一生苦しむじゃないですか・・・自分のために命を投げ出されたりしたら、一生忘れないじゃないですか・・・

彷徨う女 ・・・・何よそれ。

学生 1 だから私、毒を牛乳と混ぜて持ってきたんですよ。この毒は、飲んでからゆっくり効いてくるんです。だけれど、確実に死ぬことができる毒なんです。苦労したんですよ、実際。この毒、手に入るの。インターネットとかで調べて、お金だって結構かかったし・・・

学生 2 ・・・・

学生 1 私、彼女が牛乳飲めないことはもちろん知っていましたよ。だって、彼女が牛乳飲んだりして、私より先に逝ってしまったりしたら、計画は台無しですからね。おかげさまで、うまくいきまして・・・これで彼女の見ている目の前で、私、死ぬことができます・・・本当にありがとうございます・・・

学生 1、気分が悪くなる。

学生 1 気分が悪くなってきました。ちよつとすいません・・・横になります・・・毒が・・・毒が効いてきたようです・・・あ、よく見えてくださいね・・・あなたのために死ぬんです・・・忘れなidekudaisaiね・・・あなたのこと・・・死ぬほど憎むくらい愛していた人がいたことを・・・さようなら・・・さようなら・・・

学生 1、横たわる。

そのまま動かない。

包帯の男 ・・・・嘘だろ？おい？何の薬を混ぜたんだよ・・・おい・・・お
いってば・・・

彷徨う女

・・・

包帯の男

あんたも・・・飲んだよね・・・牛乳・・・

彷徨う女

(頷く)

包帯の男

・・・どう？気分・・・

彷徨う女

今のところは・・・そんなにたくさん飲んだわけじゃないか

ら・・・

包帯の男

まったく・・・どうにかしているよ、身勝手というか・・・命を何だと思っているんだ・・・あんたもそうだよ。いくら娘を助けたいからってさ、何もこんな若い娘さん、殺そうとすることないだろう。そんなものじゃないでしょう、命は。もっと大切にしないでくちや・・・(学生2に)わかったでしょう、あなたがしようとしていたことが、どれだけ馬鹿げていたのか。そういうのを、ウストランカチって言うんだよ。いったい、どんな教育受けてきたんだか。高校二年生にもなって・・・

学生 2

少なくとも、友情なんかには、何の信頼もおけないってことがわかりました。したがって、あなたに、ウストランカチと言われる筋合いはないということです。

包帯の男

・・・まあ、いいさ。言葉をぶつけることで、楽になるんだったら、いくらでも言いなよ。幸か不幸かわからないけど、歳取ると、何言われても傷つかなくなるんだよ、若い頃みたいに。

彷徨う女

・・・なぜ、こんなにも憎んでいたの？あなたのこと・・・

包帯の男

そうだよ・・・それ訊きたいな・・・

学生 2

・・・恋のもつれです。

彷徨う女

それは・・・彼女の恋人を奪いとったとか？そういう・・・

学生 2

違います。私たち愛しあっていたんです。つい最近まで・・・深く、心の奥の部分で、つながっていたんです。でもある日突然、

奪い去られました。一瞬のことでした。私たちには、何も残りませんでした。あんなに愛し合い、つながりあっていたのに、何も残りませんでした。でも、彼女がどうして牛乳に毒を入れたのかはわかりません。だってそれは、私にとって、一番効果のない行動だからです。なぜなら今の私にはココロが残っていません。ココロは、ココロのないところでは何の意味も持ちません。ココロはココロで満ち溢れた人の前で、はじめて意味を持つんです。私はだから夜の動物園に行くんです。知らない場所に行くんです。なぜなら私はもうすぐ死ぬから、私は私の知らない場所へ行くん

です。だから連れていってください。私を夜の動物園に連れてい
ってください。

包帯の男
何が奪いとつたんだ？一体何が、君たちの大切なものを、奪い去
つたんだ？……（彷徨う女に）大丈夫か？おい。

彷徨う女
ごめんなさい……なんか……わたし……なんか……あ
れ？

包帯の男
……そういえば言っていたな……ゆっくりだけど、確実に死
ぬ毒だつて……牛乳に混ぜたのはそんな薬だつて……

彷徨う女
……ごめんなさい……私……助けることができないか
も……ごめんなさい……ベッドの上の私の娘……助けるこ
とができなかった……あの日産マーチも……まだ足回り、元
気なのに……ごめんなさい……ミイラ取りがミイラになるつ
て言うのかしら……

包帯の男
そうじゃないかな……たぶん合ってる……この場合……
彷徨う女
さようなら……さようなら……（と死んでいく）

彷徨う女、
倒れる……

包帯の男
おい……おい……駄目だ……もう息がない……

学生 2
……私たちが生き残りましたね。

包帯の男
……そうだな……

学生 2
この事実には、何か道徳的な教えがあるんでしょうか？それとも
ただの偶然でしょうか。

包帯の男
私たちが生き残り、二人が死んでしまったことが？

学生 2
ええ、そうです。

包帯の男
どうだろうね……直接の死因は、牛乳に毒を混ぜたことによる
ものでしょう。したがって、これは、ある女子高校生が犯した殺
人事件であり、容疑者はその直後、同じ毒により自殺した……
事情を知らないものには、奇怪（きっかい）にうつるだろうね。
動機がはっきりしないもの。

学生 2
これから、死ぬでしたよね。

包帯の男
君こそ、これから死ぬんだろう？

学生 2
もちろんです。

包帯の男
私も電車に飛び込んで、ね。

学生 2
では、何の道徳的な教えはないということですよ。だってい

れ全員死ぬんですもの。

包帯の男

でも実際には死なないんだろ？

学生 2

ええ実際には。だけど、リアルな死を、ここに再現するつもりです。

包帯の男

よかったら・・・教えてくれないか。その、君の言う、リアルって何だ？わからないんだよ・・・

学生 2

だから、行くんです。夜の動物園に行くんです。

包帯の男

行けばわかるのか？それにどうやって行くんだよ？

学生 2

車はあります。道路だってあります。だけど私には免許だけがないのです。

包帯の男

・・・何があるんだ・・・夜の動物園には・・・そこには、リアルな死があるのかい？

学生 2

それを、この目で見てみるんです。果たして夜の動物園は、どこなのか。そこにあるのは、果たしてリアルな死なのか。それとも、

包帯の男

ただの夜の動物園なのか・・・

学生 2

・・・鍵は？車の？

包帯の男

・・・探します。手伝ってくれませんか。

包帯の男

・・・わかった、わかったよ。

包帯の男と、学生2、彷徨う女の荷物やポケットをあさる。

学生 2

まだ・・・温かいですね・・・

包帯の男

死んだばかりだからな・・・

学生 2

どのくらいで始まるんですか？・・・死後硬直・・・

包帯の男

一時間位してからだろ。

学生 2

そうですか・・・

包帯の男

・・・あつたぞ・・・これだ・・・これが鍵だ・・・日産って

学生 2

書いてある・・・

包帯の男

これ・・・

学生 2

何だ？

学生 2

・・・娘さんですかね・・・

学生2、パスケースのようなものを見ている。

包帯の男

(覗き込んで)・・・可哀想になあ・・・もう助からないって言

学生 2
つてたなあ・・・
そうですね。

包帯の男
しかし、君、殺されるところだったんだよな。それなのに、君がうんと憎まれていたお陰で、殺される前に、殺してくれたんだ。君の友達がね・・・気の毒だよな・・・でも・・・娘のためにここに来たのに、結局自分が死んじまった・・・わからないよな・・・人の生き死については・・・いったいどこが境なのかねえ・・・

学生 2、パステースを彷徨う女の身体の上に置き、毛布のようなものを掛ける。

続いて、学生1のそばに行き、手を取る。

包帯の男
あんまり詳しくはないんだけど、その、女同士ってのは、愛し合えるのかい・・・

学生 2
女の人とだったら、愛し合えますか？

包帯の男
・・・
どうですか？

包帯の男
・・・許婚があるんです。その女は私を愛しているんです。だから僕はこの包帯を取って、この顔を見せてあげたんです。すると彼女は、僕の胸に顔を押しあてて、泣くんです。悲しくはないって言うんです。彼女が嘘をついているんです。僕は、こう見えて、センチメンタルなことが嫌いな男ですからね、だから潔く諦めました・・・愛し合っているのか、そうでないのか・・・正直僕にはわかりません。

学生 2
私には、死んだ気になってやれば、必ずできるって言う父がいました。私も私の母もそんな父にうんざりしていたんですが、じゃあ一度「死んだ気」になってみるかって思ったんです。だって、十七歳ですよ？今の私に何か確信を持ってって方が無理です。でも一度死んだ気になってみるのも悪くはないかって、一度でも死んでみたのなら、本当の私を知ることができると思ったんです。だからこうして、ここに来て、私の命を一度投げ出してみようって思ったんです。母には何も言ってきました。そんなことしたら、きつと止められるからです。だけど、この子がそれに気付いて、ここまでついて来るだなんて思ってもみなかった。もしこ

の子が気付かないで、私一人でここに来ていたら、きっと私は死んでいたに違いありません。なんだか、ノリで死んでしまったっていかもしれません。だけど、もしノリで死んでしまったら、いろいろな人が悲しんでくれたかもしれないけれど、私がノリで死んだってことを、誰も気付かないでしょうし、だけど、少なくともこの二人は死ななかった。この子が牛乳に毒を入れたのが悪かったのでしょうか。それとも、娘さんが病気だったことがいけなかったのでしょうか。それとも、夜の動物園に私が行きたいと言ったことがいけなかったのでしょうか。いいえ、たぶんそのどれでもありません。原因は一つではありません。この身体を引き裂いて新鮮な臓器を取り出し、病院に届ければ、私は娘さんの身体の中で、私として生き続けることが、果たしてできるのでしょうか。

包帯の男

学生 2

そのおばさんの荷物の中に、恐らく私のお腹を切り刻もうとした包丁が入っています。すいませんが、その包丁を持って、私の方に向けてくれませんか。そして、私のお腹を切って、私の中にある、私を動かしている、私の大事なものを取り出してくれませんか。お願いします。これは人殺しではありません。私は、この事実からたぶん逃げたいけないのです。さあ、お願いします。そのバッグの中にある包丁を、私に向けてください！さあ！

包帯の男、
バッグの中から、包丁を取り出す。

包帯の男

よくわからないけど、こんなものじゃ、人間の身体を切るなんて不可能だろ。まず先に刃がやられるし、同時に私の手だって傷がつく。それに、内臓に到達する前に、肋骨が何本もあるから、そう簡単にコトは進まないですよ・・・

学生 2

包帯の男

それでもいいから、こちらに向けてください！
もはや、筋の通った説明を求めることは、不可能なのかね・・・
まったく・・・僕は、死ということ、ある問題を解決しようとして
しているのではなく、すでに死人に等しい自分のからだを、自分で
処理しようとしているだけだったのに。今更、英雄的な覚悟や、
非現実的な空想で、この一瞬を、悲壮な物語に作り上げる必要な
どなかったのに・・・

学生 2 どうせ死ぬんでしよう。死ぬ前に、殺人を犯したって、誰も傷つかないでしょう。

電車が向こうから近づいてくる・・・

包帯の男 (電車の通る音で、セリフは聞こえない) しかし家族が！君の家族が悲しむだろう。僕はやがて死ぬけれど、君の家族を悲しませるようなことは、僕の望むところじゃない！

電車・・・行ってしまう・・・

学生 2 何ですか・・・？どうかしましたか？

包帯の男 何でもない・・・何でも・・・

眼鏡の男が登場する。

眼鏡の男 何をしているんですか。

包帯の男 ああ・・・これは、どうも。

眼鏡の男 どうもじゃありませんよ。包丁を人様に向けるだなんて、だったら、僕に向けたまえ！

包帯の男 ・・・・あ・・・いや・・・しかしね・・・

眼鏡の男 ・・・・さあ・・・

包帯の男 いや・・・

眼鏡の男 (学生2に) もう、帰りなよ。あとは任せて。

学生 2 でも・・・

眼鏡の男 いいから・・・帰りなよ。生きて、帰るんだ。それが、きっと、君が死のうとしたことで辿りついたことじゃないかな。

包帯の男 聞いていたのか・・・

眼鏡の男 だって、この芝居は、僕との芝居だろ？一体、何を考えているのさ。

包帯の男 芝居？どこが芝居だよ。

眼鏡の男 どこがって、これは芝居だろ？駄目だよ、女子高生巻き込んだりしたらさ。

学生 2 芝居って・・・演劇？

眼鏡の男 そうだよ。

学生 2 だったら、ここで、観てはいけませんか。邪魔はしませんか
ら。

眼鏡の男 でも、二人も死んでしまったし。
学生 2 人が死んでしまったら、芝居を観てはいけませんか。

眼鏡の男 (包帯の男に) どう思う？

包帯の男 どうでしょうか・・・いいのか、悪いのか、ちょっと私にはわか
りません。

眼鏡の男 いいか悪いかよりさ、あんた、この子に俺たちの芝居を観られて
もいいかってことだよ。

包帯の男 そりやもう。別に、観るだけでしたら、何の問題もありません。

眼鏡の男 あっそ。だったらいいよ。そこで観ていなよ。家に帰るのは、そ
れからでもいいだろ。

包帯の男 じゃあ、どこからはじめますか。

眼鏡の男 後半だろ？後半。もうずいぶん待たせたからな。早いとこ、やつ
っちゃおう。なっ・・・あんた、立派な仕事があるのに、それ
だけで生きている甲斐があるだろうに。

包帯の男 生存の意義はどうでもいいのですよ。君だって、これからどんな
仕事でもできる。どんな恋でもできる。さらに、芸術家といえ
ば、仕事そのものが恋人じゃないですか。身体のすぐむような、ぞく
ぞくするような、そういう状態にいつだってなれるんじゃないで
すか。今夜、君という人に会って、いろいろ話をしたが、とにかく
、死ぬということは、理屈じゃいかんのだし、これから次の汽
車を待つにしても、この後先の争いが起きるに決まっているんだ
から、どうです。この辺で一杯やって、いずれそのうち、別々に
やることにしようじゃないか。

眼鏡の男 別々にね・・・なんなら、今夜はあんたがおやりになって、僕が
見届け役になってもいいな。

包帯の男 見届け役か。そいつはいいな。どうだい？君が先にやつちゃ。

間。 両人笑う。

眼鏡の男 しかし、笑い事じゃない。

長い沈黙。 両人、また笑う。

包帯の男　こんなことするのにや、見物はない方がいいだろう。
眼鏡の男　つまらんことになるものだなあ。

包帯の男　こうなると命なんてものは、誰のもんだか分からなくなるね。
眼鏡の男　人のものでないことは、確かだ。

包帯の男　たしかか、それが。
眼鏡の男　まあ、もう少し考えさせてください。一体僕は、何しにここに来たんです。

包帯の男　まあ、自分の命が人の命より大事だということを知りに来たんだね。

眼鏡の男　僕はどうしても自分の命が、そんなに大事なものだとは思えない。

包帯の男　君にとつて、それよりももっとも大事でない命が、もう一つここにあるわけなんだ。

眼鏡の男　そうかな。しかし僕はあれほど決心していたんです。

包帯の男　じゃあ、その決心を断行したまえ。さ、僕がいて邪魔なら、僕は帰るよ。それとも元気をつけてあげようか。

電車が、ゆっくり近づいてくる。

眼鏡の男　さあ、一緒に来てください。一緒に死にしましょう。

包帯の男　君からやりたまえ。僕は急ぐ必要はないんだ。彼女のことだって心配だし。

眼鏡の男　何です。今になって卑怯な。彼女は芝居とは関係ない。

包帯の男　卑怯なのは君のことだ。ぐずぐずしていないで、さっさと行きたまえ。

電車、さらに近づいてくる。

包帯の男　さあ、今だ！

眼鏡の男　ちよつと、あんまり乱暴じゃありませんか。

包帯の男　失敬、失敬。

電車、通り過ぎる。

包帯の男　もういいだろ。君。さ、そろそろ引き上げよう。

眼鏡の男
包帯の男

・ ・ ・
僕はこう見えて、センチメンタルなことは、嫌いな男だ。しかし、
なんですよ。今、君を死なせるくらいなら、僕が先へ死にますよ。
本当ですよ。

学生 2

それは、友情ですか。

包帯の男

どうでしょう。友情ですから。

眼鏡の男

さつき会ったばかりなのに。友情もなにもないだろう。

包帯の男

では何でしょう。

学生 2

これは芝居ですか。

包帯の男

どうでしょう。

眼鏡の男

芝居に決まっているじゃないか。

学生 2

私が見ているのは、芝居ですか。

眼鏡の男

そうだ、芝居だよ。

学生 2

そうですか。

包帯の男

行きましようか。これから。

学生 2

どこへ。

包帯の男

決まっているでしょ。動物園です。

眼鏡の男

動物園？

包帯の男

さあ、鍵を貸してください。日産マーチの鍵を貸してください。

眼鏡の男

行きましよう。行って確かめましよう。やがて分かるはずですよ。

眼鏡の男

死んだつもりなのあなたにとつて、これが芝居だったのか、そうで

包帯の男

なかったのか。行きましよう。

眼鏡の男

ちよつと待ってくださいよ。俺はどうするんだよ。

包帯の男

はて、あなたはなぜ私と、芝居なんかをやっていたんですか？

眼鏡の男

決まってるだろ。飛び込むためさ、線路に。俺たちは、死にたが

包帯の男

っていたじゃないか。

眼鏡の男

そうでしたか。

包帯の男

そうでしたか。

沈黙。

学生 2

行きますか？一緒に。夜の動物園に。

電車が近づいてくる。

やがて幕。